

2025年4月20日 第二礼拝 イースター礼拝

説教題「あなたがたより先に」マルコによる福音書16章1〜7節

主任牧師 加藤 誠

**「さあ、行って、弟子たちとペトロに告げなさい。『あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。かねて言われたとおり、そこでお目にかかれる』と。」(マルコ16:7)**

イースター。神が主イエスを墓の中から起こし、復活の命の希望をあらわされた日。この日がなければキリスト教会は誕生しませんでしたし、私たちもここにはいません。この大切な日を覚えて一緒に礼拝できることを感謝します。

それにしても復活とはどういう出来事だったのでしょうか。死人が復活するなど普通はありえないことであり、私たちには信じがたいことです。実は主イエスの復活について語る新約聖書の証言は混乱しています。きれいに「統一」はされていません。主イエスの弟子たちにとっても復活は信じがたく、理解しがたいことだったのです。

しかしながら歴史的に一つだけ確かなこと。それは弟子たちに「復活」事件が起こったということ。十字架の場面で逃げたダメダメな弟子たちが、イエス・キリストを宣べ伝える者に百八十度変えられたということです。弱虫で信仰薄く情けない弟子たちがなぜ新しく創り変えられたのか。そこには何があったのでしょうか。

私なりの理解では、弟子たちに起こった「復活」は、彼らの心の目が聖霊によって開かれて、イエス・キリストの十字架の意味がはっきり示された出来事だったと受け止めています。弟子たちにとって十字架は絶望でした。愛するイエスが残酷な処刑で殺されてしまった。人びとを愛し、自分をささげて神の愛を宣べ伝えた方が、権力者たちの陰謀により、でたらめな裁判で死刑にされた。こんなことが許されているのか。神はどこにいるのか。神にもこの世界にも絶望させられた出来事。それが十字架でした。それだけではない。彼らは自分たちの信仰の薄っぺらさ、口先だけの愛の者、なんとズルくて情けない自分たちなのか。自分への絶望に打ちのめされていたはずです。その絶望の十字架が、実は神の愛の出来事であること。神の愛はついていたのではない。むしろ罪にまみれた人間に対する神の愛の真実がはっきり示されたのが十字架だった。真暗闇にしか見えなかった十字架が、聖霊により神の愛の光の中に見えてきた出来事。それが弟子たちにとっての復活だったのではないかと思うのです。

約四十年前、中学校の教師をしていた私は、ある幾つかの出来事を通して自分の行き詰まりと破綻を示された時がありました。「できる！」と思い「愛せる！」と思っていた自分の信仰の薄っぺらさと愛の貧しさを突きつけられ、こんな自分が生きる意味があるのかと問われました。その時に聖書と向かい合わされ、自分のいい加減さをえぐられると同時に、そのような自分になお注がれている神の愛を示されたのです。私の心に黙ったまま十字架で苦しみ祈っておられる主イエスの姿が示されると同時に、

「あなたはわたしの愛する子」という静かな声が響いてきました。その時、わたしは破綻した自分の現実から逃げるのではなく、破綻の中から新たに歩みだす勇氣と力をいただきました。それは私の中に起こった「復活」事件でした。弟子たちもそうだったのではないかと思います。彼らの心に十字架の主が光の中に示された時、彼らは十字架から逃げてしまった自分の現実と向かい合い、そこから神と隣り人に向かってもう一度新たに歩みだしていく勇氣と力をいただいたのではないかと。

ですから復活は、主イエスが「神が私を救った。私は不死身だ」と自分の力を誇示したパフォーマンスではありません。人びとの前に復活した姿を見せ、自分を十字架に追いやった者たちをひれ伏させ、勝利を宣言するようなパフォーマンスではありません。復活は、弟子たちに十字架のほんとうの意味が明らかに示された出来事。聖霊によって弟子たちの心の目が開かれて、あの十字架の暗闇の中に愛の神が共に確かにおられたことが示された、靈的な変革の出来事。そして聖霊によって「神の愛と希望」に目を開かれた弟子たちが、この世界の罪深さと自らの弱さを見つめつつも、なおこの世界で主イエスに従って生きる勇氣と力を受け取っていった出来事だったのです。

十字架は私たちの世界の現実そのものです。いい加減で自己中心的な権力者が我が物にふるまい、人びとの命を踏みにじられていく。目を背けたくなるような人間の罪深さと愚かさ。「神などどこにいるのか!」と叫ばざるを得ない十字架は今日も私たちの世界にあふれています。しかしその十字架のただ中に神はともにおられる。この世界の最も闇の深い場所に、人びとの苦悩が溢れている処に神はともにおられる。どんな状況でも、どんな人でも、神の愛のまなざしから漏れている人は一人もいない。この世界で「神の愛と希望」が注がれていない場所はない。この「神の愛と希望」を最後まで生き抜かれた主イエスを、神は墓の中から復活させられたのです。

安息日が明けた朝、主イエスが葬られた墓に向かった女性たちがいました。彼女たちはイエスの十字架を見届け、墓に葬られるまでをも見届けた女性たちです。大きな石を動かす力を持たない非力な女性たち。理性で考えたなら彼女たちの行動は「意味がない」「行くだけ無駄」なものかもしれません。しかし彼女たちを突き動かし、墓へと向かわせたもの。それは主イエスへの愛と信頼だったと思うのです。

主イエスが自分たちに手渡してくれた「神の愛と希望」は、唾を吐きかけられ、踏みじられても、決して無にならない。滅びない。「神の愛と希望」は必ずこの世界を変える。主イエスを裏切った者たちも、主イエスに唾を吐きかけた者たちをも、必ず新しく創り直す。「あの方は、あなたがたより先にガリラヤへ行かれる。」ガリラヤ、つまり弟子たちが生まれ育ち、暮らしてきた場所。あなたのガリラヤで「神の愛と希望」の約束を握りしめて生きていきなさい。復活の主は必ずともにいてくださる。この約束を握りしめて、私たちもこのイースターから新しく歩みだしていきましょう。